The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	畏敬と敬慕の間
Author(s)	川崎, 剛志
Citation	語文. 2019, 112, p. 12-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

畏敬と敬慕の間

川崎剛志

信多先生、ありがとうございました。

昭和五十五年、私は大阪大学に入学し、同五十七年、国語国文学研究室に入った。当時、先生は現在の私の年齢よりもずっと若く、研究室旅行の写真をみるとその通りなのだが、私の記憶のなかに若い先生はいらっしゃらない。既に先生は浄瑠璃、近松の研究を牽引され、また欧米で開催された奈良絵本国際研究会議にご出席されるなど絵巻物の研究でも最前線で活躍されていた。入学して二年間、勉学と無縁の生活を送ってきた私には、先生は雲の上の人というよりも異界の人だったが、授業のなかでくりかえし先生が、常識を疑え、通説を鵜呑みにするな、とおっしゃったのを、皮相的に受けとめて、私は演習で軽薄な発表を行い、奇矯な内容のレポートを提出した。先生はそれらを正面から受けとめて厳しく批判、指導され、ごくまれに面白がってくださった。先生のおことばの真意とそれを貫く覚悟の重さがわかるようになったのはずいぶん後の事で、軽薄ゆえに私は研究の入口に立つことができた。けしからん、と先生は一喝されるだろうか。それとも、縁は不思議だね、と笑ってくださるだろうか。

先生の教えを受けた者は多く、先生をまず畏敬し、やがて敬慕した。ただ、畏敬から敬慕に転じるのではなく、このふたつの思いがせめぎ合いながら不安定なかたちで同居した。私の場合もそうだった。そしてそれは、ずっと続いた。大学院を修了して大阪を離れた後も、書物を調査しているとき、一句の解釈をあれこれ考えているとき、論文のはじめにを書いているとき、ふと先生の姿が、とくに演習のときの、一字一句の解釈もゆるがせにしない厳しい先生の姿が思い出された。反射的に背筋が伸び、あの演習の席で発表できるのか、と自らに詰問する。また、あの演習の席に列なった畏友らになめられたりしないか、とも。当時、先生のもとには、国文学研究者のイメージにそぐわない、一見して先生の教え子とは見えない類の大学院生が、先生を慕って集まっていた。先生にとっても予期できない化学反応であったかもしれない

が、いつからか、先生はそれを面白がっていらっしゃったように見えた。

先生は国文学を熟知し、その精華を探求してこられた。聖俗、硬軟、多種多様な文学・文化事象に目を配りながら、優れた作家、作品あるいは文学史上の水脈を厳選して研究対象とされた。そして、文学史上の水脈を論じられるときも、作品の一字一句の解釈をゆるがせにされることはなかった。先生は稀代の文学者らの個の才を愛されたが、同時に、名もない作者の作品にもすぐれた個の才がはたらいている場合があり、それを作品から読み解くのもたいせつな仕事だ、と教えてくださった。先生のご研究のうち私が最も学恩に浴したのは、中世から近世にかけての語り物の研究だった。浄瑠璃はもちろんのこと、説経、幸若舞、さらにはそれらと同材の絵巻・草子なども視野に入れた研究を先生は展開された。そのなかでとりわけ、神仏の由来を人としての苦しみの経験に求め、苦しみの末に神仏と現れたと語る本地物を重視された。『浄瑠璃御前物語』の研究では、節略され、不規則な断片の寄せ集めのようになった現存諸本を丹念に校合された末に、失われて久しい原本の姿を復原し、それが本地物の様式を備えることを実証された。幸い私どもは大学院で、先生がなさった膨大な本文校合作業の一端を追体験できた。そして、校合作業の結果を本文の校訂にいかすためには、精確な読解の力が必要なこともそこで学んだ。他方、『ものぐさ太郎』の研究では、原本の復原までは同じながら、作品から個の才のはたらきを読み解き、これが本地物のパロディであることを見抜かれた。私の座右には、修士のとき先生からいただいた署名入りの『古本物くさ太郎』（松蔭国文資料叢刊刊行会、一九七六）がある。私の研究対象はずいぶん信仰のほうに傾いたけれども、この書物のお蔭で、ことばの表現にそって作品を読む姿勢だけはなんとか保持してきた。

折に触れて先生は、晩年に研究成果を広く社会に還元する仕事をしたいとおっしゃっていた。そのお仕事のひとつが、古典文学の現代語訳だった。先生には近松や西鶴、馬琴の名作の現代語訳に取り組む選択肢もあり、またそれを期待する者も多かったはずだが、先生はあえて二編の語り物を選ばれた。語り物に対する愛着は当然のことながら、おそらく、古典文学史上の重要な水脈を形成する、語り物の主要な作品の本来の姿が失われて久しいことを嘆き、その「完本」を蘇らせることを研究者としての責務、いや使命と考えていらっしゃったからであろう。『現代語訳　完本　浄瑠璃物語』（和泉書院、二〇一三）、『現代語訳　完本　小栗』（同、二〇一四）がその成果である。先生が長年、浄瑠璃御前物語の諸本研究に取り組まれたことはよく知られるが、小栗の伝本研究への取り組みも長く、『説経正本集』第二、附録解題（横山重編、角川書店、一九六八）に遡る。附録六篇のうち三篇が小栗の伝本で、うち二篇の解題には「本書の解題の草稿は信多純一氏作」とみえる。それに引き続いて横山重氏が、

説経正本集の第二の附録のはじめの三篇の解題は、まづ横山が作製した。これをより詳しく解説して、より長編に作製し

たのは、信多純一君である。横山は更に、ある程度の改変を加へたけれど、信多説を大部分は容認した。信多純一君の解説は力作である。

しかし、これから以後は、信多説と、横山の見解とは、大差を生じてゐる。で、まづ信多説を紹介し、その後に、横山の見解を示す。

と前置きして自説を述べておられる。先生の学問を育んだ濃密な時間の一端を垣間見ることができる。先生が小栗の現代語訳を選ばれた理由の一つは、こうした思い出にあったのかもしれない。

『現代語訳　完本　小栗』の原稿の完成までもうすぐというところで、先生は病にかかられた。その仕事を私が引き継ぎ、最後の半歩をお手伝いした。そして先生は共著として出版せよと命じられた。私には過分なご指示だったが、喜んでお受けした。それから私は久しぶりに『説経正本集』を読みなおした。私の座右にある『説経正本集』は、畏友、故時松孝文さんの遺品だ。時松さんの修士論文の題目は「古瑠璃の研究」だと聞いている。真偽のほどは定かでないが、期限ぎりぎりで提出したため「浄」を書き忘れたのだと彼は話し、「こるり」「こるり」と連呼していたのを記憶している。浄瑠璃という芸能の本質に肉薄しようと果敢に挑む彼の姿を、先生はうれしそうに見守り、他の学生よりも一等厳しく接していらっしゃった。私が引き継いだ後、『現代語訳　完本　小栗』の作業は遅々として進まなかったが、それでもなんとか完成できたのは、時松さんを含めて、信多先生と先生の学問を慕う多くの方々の有形無形の支えと後押しがあったからだと思う。予定よりもずいぶん遅れたが、先生は刊行を喜んでくださった。その報告の折、先生に言い忘れたことがある。本書を編む過程ではじめてお会いした何人かの方から、先生のお仕事を尊敬している、先生の御本のためならば協力を惜しまない、と言っていただいたことだ。この場をかりて、先生にご報告申し上げたい。

ご冥福をお祈りいたします。合掌。

（かわさき・つよし　就実大学教授）